夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について

村上春樹（むらかみはるき）

大意　少女に「どれくらい私のこと好き？」と尋ねられた少年は、物語で答える。夜中に目が覚めると自分はまったくのひとりぼっちで、世界から忘れ去られている、まるで鉄の箱に詰められて海に沈められているようだと思う。その時、遠くで汽笛の音がして、それを聞いているといつの間にか浮上し始め、この世界に戻ってくる、それは汽笛のせいだ、そしてその汽笛と同じくらい君のことを愛している、と少年は語る。次は少女が語る番である。

少年が語る〈物語空間〉

◎第一段（「どれくらい私のことを好き？」）

女の子が男の子に質問する。「あなたはどれくらい私のことを好き？」

少年はしばらく考えてから、静かな声で、「夜中の汽笛くらい」と答える。

少女は黙って話の続きを待つ。そこにはきっと何かお話があるに違いない。

少女の内言

「あるとき、夜中にふと目が覚める」と彼は話し始める。「正確な時刻はわからない。たぶん二時か三時か、そんなものだと思う。でも何時かというのはそれほど重要なことじゃない。とにかくそれは真夜中で、僕はまったくのひとりぼっちで、まわりには誰もいない。いいかい、想像してみてほしい。あたりは真っ暗で、なにも見えない。物音ひとつ聞こえない。時計の針が時を刻む音だって聞こえない——時計はとまってしまったのかもしれないな。そして僕は突然、自分が知っている誰からも、自分が知っているどこの場所からも、信じられないくらい遠く隔てられ、引き離されているんだと感じる。自分が、この広い世界の中で誰からも愛されず、誰からも声をかけられず、誰にも思い出してももらえない存在になってしまっていることがわかる。たとえ僕がそのまま消えてしまったとしても誰も気づかないだろう。それはまるで厚い鉄の箱に詰められて、深い海の底に沈められたような気持なんだよ。気圧のせいで心臓が痛くて、そのままふたつにびりびりと張り裂けてしまいそうな——そういう気持ってわかるかな？」

少女の心の内を知り得る語り手が、少年の言葉が少女に届いていること、心に響いていることを読者の前に明らかにすることによって、物語の効用を視覚化するという効果がある。

少女はうなずく。たぶんわかると思う。

少年は続ける。「それはおそらく人間が生きている中で経験するいちばん辛いことのひとつなんだ。ほんとうにそのまま死んでしまいたいくらい悲しくて辛い気持だ。いや、そうじゃない、死んでしまいたいというようなことじゃなくて、そのまま放っておけば、箱の中の空気が薄くなって実際に死んでしまうはずだ。それはたとえなんかじゃない。ほんとうのことなんだよ。それが真夜中にひとりぼっちで、目を覚ますことの意味なんだ。それもわかる？」

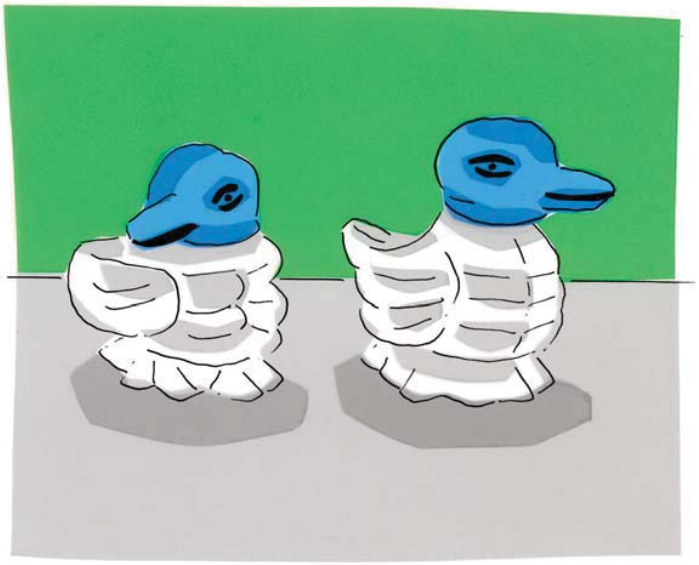
少年は、「愛」を語る前にまず「孤独」について語った。「孤独」は絶望的な距離に置き換えられて少女の前に（読者の前に）差し出される。

少女はまた黙ってうなずく。少年は少し間を置く。

「汽笛」の話をする前に敢えて少し間を取ることで、物語の劇的効果を高めることをねらったと考えられる。

◎第二段（夜中の汽笛と同じくらい好きだ）

「でもそのときずっと遠くで汽笛の音が聞こえる。それはほんとうにほんとうに遠い汽笛なんだ。いったいどこに鉄道の線路なんかがあるのか、僕にもわからない。それくらい遠くなんだ。聞こえたか聞こえないかというくらいの音だ。でもそれが汽車の汽笛であるこ



安西水丸・画

とは僕にはわかる。間違いない。僕は暗闇の中でじっと耳を澄ます。そしてもう一度、その汽笛を耳にする。それから僕の心臓は痛むことをやめる。時計の針は動き始める。鉄の箱は海面へ向けてゆっくり浮かび上がっていく。それはみんなその小さな汽笛のせいなんだね。聞こえるか聞こえないか、それくらい微かな汽笛のせいなんだ。そして僕はその汽笛と同じくらい君のことを愛している」

そこで少年の短い物語は終る。今度は少女が自分の物語を語り始める。

（出典『村上朝日堂超短篇小説　夜のくもざる』一九九八年）新潮文庫

世界から隔絶され、絶望的な孤独の中にある自分のもとに距離を超えて届く希望の音であり、世界とのつながりを回復させ、生への帰還をもたらすもの。

（朝日新聞社提供）

村上春樹　一九四九（昭和二四）年～。小説家。京都府の生まれ。アメリカ現代文学の影響を受けた乾いた簡潔な文体で、現代人の愛や孤独を描いている。作品に「風の歌を聴け」「ねじまき鳥クロニクル」「1Q84」などがある。

課題A

一　「少女」は「少年の短い物語」（14・13）をどのように受けとめたのだろうか、話し合ってみよう。

二　表題にある「物語の効用」とはどのようなことだろうか、話し合ってみよう。

［解答例］
・少年の孤独に触れた少女は、深く心を動かされ、何とか少年の期待に応えようと思った。
・思いがけず少年の孤独の物語を聞かされた少女は、正直戸惑っていた。「夜中の汽笛」にたとえてくれた少年の思いは嬉しいには違いないが、一方でどうして今までその孤独に気づかなかったのだろうとも思った。
・軽い気持ちで「どれくらい好き？」と聞いたのに、思いがけず重い話を聞かされたので、嬉しいと思う反面、とても受けとめきれないとも思った。
・少年の物語は理解できるものの、やはり少女には少し物足りなかった。そこには少女を必要としている自分（少年）の思いばかりがあって、具体的に少女をどう見ているのか、どんなところがどんなふうに好きなのかはまったく語られていなかったからである。

（以下、指導書参照）

課題B

✤「少女」が「少年」に語る物語を創作してみよう。

★読書の扉→416ページ

［解答例］
・自分の心の世界を物語にし、そこに少女を招き入れることによって、自分の感じている孤独や少女への思いの切実さを少女に感じ取ってもらうことができる。そこに物語の有用性があるということではないか。
・愛という目に見えないものの大きさを伝えるためには、それを目に見えるものに置き換える必要があるが、それには物語は非常に役に立つということではないか。
・「どれくらい好きか」というような質問の場合、中途半端な答えでは少女は満足してくれないおそれがあるので、少年はできるだけドラマチックな物語を用意して少女の心を充たす必要があった。実際、少年の物語は役に立った、物語には使い道があるということではないか。
・二人で物語の交換をすることによって、普通に会話する以上の関係になって、互いの絆が深まるのだとすれば、これも物語の効用と言えるのではないか。